

## 名古屋における医薬系博物館の萌芽

—大須地区で開催された博覧会と博物館—

野尻佳与子

奈良女子大学大学院人間文化研究科

【はじめに】わが国における近代博覧会は、明治4年(5月)に九段坂上御薬園跡の招魂社で催された「大学南校物産会」を濫觴とし、続いて京都(10月・西本願寺)、名古屋(11月・総見寺)などで開催された。そして翌5年に文部省博物館が湯島聖堂大成堂で行った博覧会が、常設の博物館へと発展していった。名古屋でも博覧会の経験を活かしながら11年に最初の博物館が誕生した。さらに25年に教育博物館が開館している。こうした草創期の展示施設には医学分野との関わりが随所で見られるため、名古屋大須界隈に存在していた2つの博物館の設立から廃館までを紹介する。

【名古屋の博覧会】尾張における博覧会は、文政10年(1827)3月15日に伊藤圭介(修養堂)の自宅で開かれた本草会が最初とされている。その後、同年9月15日に大河内存真(生済堂)主宰の本草会や、天保3年(1832)から5年にかけては毎年1回、尾張医学館で薬品会が開催された。本草学は水谷豊文を中心とする「菅百社」(後の随意会、浪越本草会)が結成され、伊藤圭介、田中芳男らによって動植物に関する学問的な考察、同定が行われるなど日本の最高水準に及んだ。もともとは、こうした本草学から始まった博覧会であったが、明治に入ると殖産興業政策と古器旧物を保存しようとする文化財保護政策が指向されるようになっていった。

【愛知県博物館(愛知県商品陳列館)】=門前町総見寺境内

明治11年に開設されたのは「工芸博物館」(敷地3,857坪)であるが、運営形態の変化に伴って14年に「公立名古屋博物館」、16年に「愛知県博物館」と名称変更が行われた。そして40年にこれまでの建物を取り壊すことが決まり、新しくルネッサンス様式の洋風建造物(敷地6,238坪/工費372,346円)が43年3月に竣工、44年1月に名称を「愛知県商品陳列館」と変えて新装開館した。さらに大正10年に「愛知県商品陳列所」と改称したが、昭和5年の工事での地盤沈下と道路拡張に伴う区画整理によって9年に廃館となり、「愛知県産業貿易館」(中区丸の内)に一部の機能は移された。

発表者は、正面玄関から愛知商品陳列館を撮影した絵葉書を最近入手した。写真には左右の門柱の両外側に、幅3m、高さ4mほどの門衛所が2棟あり、それぞれの上部に高さ5m程の巨大な男女の石膏像が写っている。2体の立像は、医学を象徴する「アスクレピオス像」と衛生を司る「ヒュギエイア像」の特徴が表れている。これらは竣工時から設置されていた石膏像ではなく、大正7年5月に開会した衛生展覧会を記念して造られたものであることが判明した。

【愛知教育博物館(明倫博物館)】=門前町五丁目七ツ寺境内

愛知医学校の解剖学者奈良坂源一郎が主宰した浪越博物会を母体として、明治25年に新設された私立の自然史博物館である。伊藤圭介の菅百社の流れを継ぐ浪越博物会の会員が持ち寄った標本などのコレクションを教育目的で活用した。地主の要求によってこの場所からの立ち退きを迫られたため、明治34年に閉鎖となり、標本と建物は尾張の徳川家(東区徳川町)に移譲されて「明倫博物館」(明倫中学校付属博物館)となった。しかしこれも後に廃止となり、大正15年に標本資料は「学習院高等科付属ミュージアム」へ寄贈された。

【まとめ】名古屋においても日本の博物館創成期の潮流に逆らうことなく、本草学の熟成と薬品会の経験を踏まえて博物館が誕生した。二つの博物館は共に名古屋の商業市街地として栄えていた大須地区にあったため混同されたようだが、内容は勸業博物館と教育博物館で全く異なるものであった。残念ながら両館とも近代的博物館として発展することもなく終焉を迎えたが、名古屋の博物館史、そして医史学においても先駆的な博物館があったことを記録に留めておきたい。